



新しい氷と ともに歩む 漁師町の現場から

四国びと FILE

(Web版 / 2012年4月16日掲載)

松本泰典さん

高知工科大学 地域連携機構
ものづくり先端技術研究室

プロフィール

1971年生まれ。兼松エンジニアリングから高知工科大学に転職。製塩技術、スラリーアイス製造技術などを地域に生かすため、現場主義をモットーに奮闘している。

編集部 | Web版四国びとの取材で何った時は、とにかく中
コメント | 土佐町の皆さんのパワーに圧倒されたのを覚えて
います。業種も性格もバラバラだけど、共通の何かでしっかり
結ばれている。そのチーム力の源は何なのか、ふたたび松本さん
に聞いてみました。

魚を新鮮なまま保存できるシャーベット状の水、「スラリーアイス」が、カツオのまち、高知県中土佐町を変えようとしている。中土佐町は、高知市から車で西に45分ほど走ったところにある人口7500人ほどの小さな港町。漫画「土佐の一本釣り(青柳裕介作)」の舞台としても知られる。商業港である久礼港を中心に、宿場町として栄えた中土佐町も、時代が変わり、高齢化、過疎化の波が押し寄せてきた。そんな中、町を活性化させるために着目したのがスラリーアイスだった。



スラリーアイスを開発したのは、高知工科大学の松本泰典さん。無類の魚好きを自負している。松本さんが、魚を新鮮なまままで保存できる温度マイナス1℃に着目して開発したスラリーアイスは、魚が凍ってしまっていた既存のスラリーアイスとは異なり、魚を凍らすことなく最適な状態で保存をすることができる。

現在、中土佐町ではスラリーアイスで保存した魚を、鮮度の良い「びんびん」とか、ピンキリの「ピン」、絶品の「ビン」などをもじった「びんび」ブランドとして、東京などの有名ホテルに販売し、好評を得ている。釣られたカツオは漁船の上でスラリーアイスに保存されるが、狭い船内にはたくさんスラリーアイスに積むことはできない。つまり、選りすぐりのカツオだけがスラリーアイスに保存される、まさに数量限定のトップブランド、別格のカツオである。

中土佐町が掲げたスローガン「すべては漁師が誇りをもって黒潮の群魚を追い続けるために 俺の子も俺の孫も」に込めるために、「一人では絶対に何もできない」と言い切る松本さんが現場でプロデュースしてきたこと、地域の変化などについて、関係者も交えて話を伺ってきた。

* 四国びとWeb版はこちらからご覧いただけます。

「漁業を守るマイナス1℃の挑戦」

<http://www.shikoku.mei.go.jp/shikokubito/interview/15/>



一人では絶対に
何もできない。
連携力をいかに
生かすか。

スラリーアイスの挑戦

民間企業から高知工科大学に転職した松本先生は、大学に入った頃、当時上司であった横川明先生に「一人では絶対に何もできない」と徹底的に教え込まれたと言う。大学人は、ともすれば入ってくる情報が偏ってしまう恐れがある。しかし、何かを判断するには正確な情報が必要であり、何をするにも地元の協力が必要不可欠だ。松本先生は、まず地元を知ることからと地域の教科書や歴史書を読むことで中土佐町を学び、首尾一貫して現場主義に拘ってきた。

平成21年11月、漁協の横にスラリーアイス製造施設が完成した。製造を任された財団法人中土佐町地域振興公社の中越さんは、「漁師さんの最初の反応は、警戒心というか、誰だ？という雰囲気でした。陰からジッと見られているような視線は感じていました」と振り返る。

初めて施設に来た人は、トイレを借りに来た漁師だった。魚を捕ることが漁師の仕事、鮮度を保持するのは仲買人の仕事と割り切っている漁師も多い。中越さんは、漁師の家を一軒一軒訪問し、スラリーアイスの効果や、それが漁業に役立つかもしれないことを、

懸命に話して回った。「漁師さんから、初めてスラリーアイスを船に持ってこいと言われた時は、涙が出るほど嬉しかった」と顔をほころばせる。しかも、釣ったカツオが陸に降ろされるのは出港する久礼港だけではない。中越さんは、漁船から連絡を受けると寄港のその時間その港にカツオを引き取りに行く、こうした地道な活動の積み重ねで、少しずつ信頼を勝ち得ていった。

「魚を釣ってなんぼ」の世界にいる 漁師が鮮度にもこだわり始めた

スラリーアイスを製造し始めてから3年。スラリーアイス入りのクーラーボックスを届ける際、最初は「漁船まで持って来い」と言っていた漁師たちが、いつからか「俺が漁船に持っていくわ」に変わった。今やスラリーアイスに対する漁師の期待は高まるばかりである。魚を終えた漁船が帰港する際、漁場に残る漁船にわざわざ船を並べてスラリーアイスを積み替えたり。胃ガンを患って以来、食事に興味がなくなっていたが、ぴんぴんのお陰で食事が楽しくなったと消費者からの声をも

漁業のまちを振興したい

カツオの一本釣りで全国に知られる中土佐町だが、高齢化による後継者不足、燃料代の高騰などにより、カツオの漁獲高は年々減少している。このような状況下で、スラリーアイスに着目したのは、中土佐町の池田町長だった。もちろんカツオに対するこだわりは人一倍持っている。巻き網で一網打尽に獲った魚よりも、やはり一本釣りが一番だ。カツオの美味しさは個体差があり、見極めるには職人技が必要、極端に言えば3枚におろした左右に差が出るほどである。極上のカツオはまさに美味。しかし、店頭に並ぶカツオはいくら新鮮と謳っていても、一口食べると「残念…」というものが少なくない。池田町長は「自分たちの知っている本来のカツオの美味しさをそのままの状態で届けたい。それが出来ればカツオの価格は上がり、漁業関係者にも還元される。必ず漁業の振興、町の活性化につながる」という思いを募らせていた。そんな矢先、知人の紹介で高知工科大学のスラリーアイスと運命的に出会うこととなる。早速大学へ赴き、初めてスラリーアイスに浸かったカツオを食べた池田町長は、これこそ自分の知っているカツオの味、その美味しさに驚いたと言う。

らったり。決して楽な道ではなかったが、中越さんは「苦労よりも嬉しいことの方が多かった」と振り返る。

漁師は「魚を釣ってなんぼ」の世界。数秒間に一本カツオを抜きあげると言われている。竿がしなっているにも関わらず、船上でスラリーアイスにカツオを漬ける漁師の姿は、想像し難いほどの大きな変化である。これまで漁師からは「自分たちの代で終わりだろう」という声がよく聞かれたが、魚価を向上させることに目覚め、モチベーションが高まっていけば、そういう声を聞くことも、いつかなくなるかもしれない。



チーム力の秘密はマネジメントにあり

中土佐町の成功によって、スラリーアイスの製造装置の需要も増え始めている。連携先の装置メーカーである株式会社泉井鐵工所では、他地域への装置の販売実績が徐々に増えている。スラリーアイスが普及すれば、当然中土佐町のライバルも増える。しかし今の本人たちはまったくそんな危機感を持っていない。もともと全国で盛り上げていこうというオープンな気質はあったが、例え特殊な水があったとしても、地域に生かす、人を動かすのは机上の理屈ではない。要はやっぱり人。中土佐の人たちの表情からは、「真似できるならやってみい」というプライドさえ垣間見える。

中土佐町での取り組みは、地域（中土佐町）の課題を、地域の技術（高知工科大学のスラリーアイス）で解決しながら、新たな価値（極上の鰹・地域の魅力（水産資源の豊富な町））を全国に発信する言わば産官学連携プロジェクトだ。例え優れた技術があったとしても、それが生かされない限り、スラリーアイスはただの水、スラリーアイス製造装置はただの機械装置の

ままである。そこで重要になってくるのが、関係するプレイヤーたちの熱意とブレない姿勢を維持するためのマネジメント力である。

連携事業によく欠けていること、そして最も重要なことは「マネジメント」である。中小企業はこれらの機能が活かしきれいていないことが多いので、産学連携において単なるグループのような連携体ができってしまうことも少なくない。研究資金獲得を目的とする研究体ができしてしまうこともまた然り。

一方で、松本さんは「僕らは決して一枚岩じゃない」と断言する。多様な分野の人が集まれば意見が異なるのは当然。「メンバーが集まるといつもぶつかっては議論が始まる」と苦笑いするが、そうした中で、ビジョン（いつまでも漁師のいる町）と目標（極上の魚を全国に届けることで魚価を向上させる）を明確にし、そのために必要なメンバーを動かし、意思共有を図りながら、少しずつ信頼関係を築き上げていくという作業を、松本さんは緩やかにコーディネートしてきた。その姿は、横川先生から引き継いだ

「一人では絶対に何もできない」という言葉にも重なる。こうしたマネジメントの力こそが中土佐町のチーム力の秘密であり、だからこそ一人一人がのびのびと能力を発揮し、チーム力を最大限に生かせるのだろう。厳格な漁師たちを前に、スラリーアイスを製造する姿を見せ続け、「だるまさんが転んだ」のように少しずつ歩みを縮めていった原動力は、そうして培われたもの。即席の連携体とは訳が違うのだ。

スラリーアイスに関わる仲間たち

「今回の取り組みは、この人たちが誰一人欠けても実現しなかった」と松本さんが語る、個性派揃いの開発チームの皆さんに、それぞれの思いを伺いました。

五針 全ては漁師が誇りをもって黒潮の群魚を追い続けるために俺の子も俺の孫も 高知県中土佐町

高知県 中土佐町長 池田 洋光さん

私の思いは単純明快です。中土佐町のシンボルである極上の鰹を全国に届けたい。そして町の振興に繋がりたいと言うことです。スラリーアイスの鰹を初めて食べた時は、とにかく驚きましたよ。試食会などで中土佐町から東京へ輸送してもほとんど味は変わらず、地元で食べるのと同じ新鮮な鰹が県外でも味わえるようになりました。松本先生と中越さんは、誠実な対応で漁師さんともいい信頼関係をつくっておられて、本当によくやってくれていますよ。

高知県 中土佐町 水産商工課長 竹邑 安生さん

“びんび”ブランドのロゴマークは、全ての魚の愛らしい幼魚が“びんび”の王冠をかぶっている姿として描きました。中土佐町の取り組みはオープンなので、ぜひ町に来て本場の魚をご賞味ください。

久礼漁業協同組合 溝渕 景久さん

スラリーアイスの魚は、そりゃぁ新鮮ですよ。久礼の漁師の平均年齢は68歳、若手と言っても50代後半という状況ですから、漁船の数も減ってきています。スラリーアイスが現状打破のきっかけになればいいですね。魚の価値が上がって、また昔のように、たくさん漁船が沖に出て、市場に大量の魚を並べてくれるよう、期待しています！

高知工科大学 社会連携部長 長山 哲雄さん

私たちの大学のミッションは、教育、研究、社会貢献が3本柱。スラリーアイスの開発は、社会貢献の重要課題のひとつとして、大学の事務方と先生が一体となって取り組んでいます。

高知工科大学 社会連携部 佐藤 暢さん

スラリーアイスの製氷技術は、実は溶液が濃くなる濃縮技術でもあります。従来の濃縮方法では損なわれてしまう風味を保持できるので、例えば季節ものの少量品種の果汁を濃縮処理する装置として、ニーズがあると思っています。装置の製造業者を一般公募するなど、新しい連携先の模索を経て、現在は経済産業省の助成事業に採択され、研究を進めています。

中土佐町地域振興公社 スラリーアイス事業部 中越 竜夫さん

最初は口も聞いてくれなかったけど、丁寧にお付き合いする中で、少しずつスラリーアイスを使ってくれる漁師さんが増えました。初めて漁師さんに「スラリーアイスを船に持ってこい」と言われた時はうれしかった！また、病気で食欲がなくなった人が、びんび鰹をきっかけに食事が楽しくなったと言ってくれた時も感動しました。

泉井鐵工所 北村 和之さん

松本先生と一緒に、スラリーアイス製造装置を開発してきました。これまでに全国で25台の装置を販売（H25年1月現在）。うちは、もともと漁労機械のメーカーで、漁師だった創業者が船上での危険な作業を軽減したいとの思いから立ち上げた会社。スラリーアイスは中土佐の漁師の未来をつくる仕事。自分たちの仕事に誇りを感じているからか、最近、若い社員も顔つきが変わってきたのがうれしいです。



四国の漁業

四国を水産面でみると、
四国の県が上位を占めている品目が少なくありません。

下表はそのなかで一部を抜粋したものです。
水産業は四国の強みのある産業ともいえます。

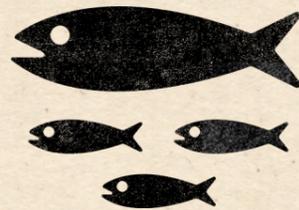
今後は、漁業者と商工業者等が通常の商取引関係を超えて協力し、
お互いの強みを活かして売れる
新商品・新サービスの開発・生産等を行い、
需要の開拓を行う等の一層の取り組みが期待されます。

海面漁業

	かつお類	たちうお	たこ類
1位	静岡 74,329t	愛媛 2,385t	北海道 17,881t
2位	三重 29,568t	大分 1,333t	兵庫 2,212t
3位	高知 25,869t	和歌山 1,107t	香川 1,349t

海面養殖

	ぶり	まだい	真珠
1位	鹿児島 22,266t	愛媛 34,738t	愛媛 7,293t
2位	愛媛 20,625t	熊本 8,789t	長崎 6,387t
3位	大分 19,679t	高知 5,501t	三重 4,341t
4位	高知 8,508t		



これまでは、厳選した高品質の商品でブランド力を上げることが目標にできてきた中土佐町だが、今後、量産化が進んでいけば、新たな体制の検討が必要となる。大量のカツオをスラリアイスで保存するには、船上ではなく港で保存せねばならず、今までよりも鮮度が落ちることは間違いない。量と質のバランスをどうとるかが今後の課題だ。品質にこだわりブランド産地として観光誘致につながる、販路拡大のために量産化を図る、加工食品などに展開する、カツオ以外のブランド魚種（メジカ等）を増すなど、関係者の思いはバラバラだが、目標を共有しているからこそ、このような方向性も含めて議論できることが中土佐町の強みだ。

松本さんは「私は中土佐町と関わり、人からはいろいろなアイデアが出てくること、3年あれば人は意識もモチベーションも変わること」を改めて思い知りました。地域に課題があつてこそ私の所属する地域連携機構の存在意義があると思っているので、これからも「ものづくり」で地域の思いに伝えていきたい。もともと隣の人と力が笑えるような地域を作りたい」と力強く語る。

中土佐町という一つの地域の取り組みが、いつか振り返れば四国らしい取り組みだった、四国発で全国の漁業に希望を与える取り組みだったと言われる日を期待したい。

地 域 の
思 い に
応 え る
も の づ
く り

